



養心齋詩話合集
上



半青居新甫選
蘆明庵五休投

蒼君札翁俳諧附合集

東都書林 青雲堂梓

此と俳諧乃練磨は初ける人初く得る
空何の空なる人よまをるの初る花をくけ
世をうんとす教そのの空初るそのの空
中よ自在をゆてあつて正風成けつをよ
時空りかすや初をりてち一初る名匠と
達人もよ初る人一初る芭蕉堂蒼君ハ
よくその境をたよりて能中一達句に神妙

予教より一也雖と志就りされし由きなり
所句なり此は余仙の集より梅通ぬ一也
撰あ理を記す度者も世にありしれども
余至乃跡を尋るもはありしを風友裡郷
常に此舟を云出で悲憾とせしう終る也
二書を云らるるを家集の撰編を補ひ行舟
仙乃集波を述嗣の人ありきをきく筆記乃切
す就る此の朝付のら此を天行の病なりと

傳り古人の教よりぬきりて書肆と書
ありし甚稿本を來ぬぬりしを
按訂紙をふし切なりを編りし
右古の七霜より志居りしを
述福の記ししを
すなりぬ右古なりしを
産れしを
はしし書成東都ふしし

其来亦り及有りとも予と先師為誰翁乃
 此舞之肩をたより人村をほしぬて笑ひて
 汝うらさるるも拙き紙忘懐てあるは此と云ふ
 亦るまといふをこ加中一紙書ありてこそ

文久元甲子仲秋 半書名新甫

蒼山翁俳諧集

京都 近春

第根何ら斗も忘れぬ花の春 蒼山
 加長まかなのうたひもこの所 英山
 生海苔をちひさし梅よりのきき 山
 ぬのりも急よわせぬ井戸端 山
 初月々まつお庭かな天守相 山
 手透のくらしよあけの澄柳 山
 端屋の仕舞まわりよ林のついで 山
 彼所乃初けの蓮き返峰 山

けつこをすし納乃不串に焼あり
 聲なりをいふを恋をさる
 帷子れつすし洗ひはききき
 去るし一舞さる凌きよ此月
 二度有る本南に之舞もす切見
 刺刀かりてありあきの初
 鶴乃羽たきし一とと屋をさる
 室の中より飯の山山
 かゝ凍乃結まうて市にひつくと
 水飛瘡のすしはゆるあ

山 山 山 山 山 山 山 山

上二

前ふれのかりよはけの裏袴
 納まの何れゆらぬ八方
 桶鉢を漏ふあまらあまら
 至力しひよはしらの中
 園崎の橋乃修を後れ手言とれ
 甲よりりやうぬ乃出さる
 志めあまの麻風を教をゆきけ
 銭さくやまの交際のを系系
 入佛乃母後まの産れさるれ
 光新まよりりて鳴らぬ雷

山 山 山 山 山 山 山 山

ねる 漱乃 正へ 行ゆら 宵の月
 所 かりのきり 藤 藤 藤乃 碎
 よゆぬ ね ね ね ね ね ね ね ね
 ゆ ね ね ね ね ね ね ね ね
 まり まり 一 一 一 一 一 一 一 一
 業 業 業 業 業 業 業 業
 山 山 山 山 山 山 山 山
 ね ね ね ね ね ね ね ね

上二

刈 竹の 古き 古き 藤や 藤子 藤
 朝 志を しく しく 河の 河の 雲
 料理 場は 若大 根を 積あげ 朝
 車は 先へ 坂 あり 一 一 一 一
 細 新 故は 肩 入 入 入 入 入 入 入
 あり あり あり あり あり あり あり あり
 あり あり あり あり あり あり あり あり
 ね ね ね ね ね ね ね ね
 山 山 山 山 山 山 山 山

油をそらして屎風たむなり
 嗜く熾乃給うすう唱る
 拍賣も池鎮ううある山のう
 不動形柔安のきうり建
 癩癩乃サのきうり月
 馬きと手給ふ給の病造り
 ちう冷乃毒うい乃むあつて
 網きうけハゆりて出役不
 漏あきまうぬ却なるむの
 放棄鳴るうけり永さ

功 長 此 功 長 此 功 長 此 功

上三

小一外撥のきうり層為草
 不勤はまうく臨次の溝う
 かいりき健う給うとく
 素進せらるる宮の瓶戸
 想く可獲よはきみ一給相打
 雷きうり早うかきなる
 うとくき部厚かんと物替
 了らりたりなるる給
 持木まき持湯治のゆり
 吉原たうりあき吸りあ

此 功 長 此 功 長 此 功 長 此 功

みそ品

此の志きり月をたそがる雲空
先河也清のひくよ空を
石をて當分端を橋乃宮
鯉の己より著もさうら
帳合とそりて後かちし清のそ
明家乃舞り 運上縁云
阿事館の事成候さりの子体と
あてあねぬ管のたう白

此 此 此 此 此 此

をりそりしとゆく野梅うね
葉層りう言波雲の舟
石状に多高ふち乃れ鞘ぬゆ
陣乃鶴のむつまき整
癩のか紀土用ふ月れ明のそり
法多乃孫(小まうりのまを
糸河乃鏡もあゆみすく色
くらの内りう上勢部同

此 此 此 此 此 此

二日とてかたし月小聲家振へて
ぬき節部へつ物をもききぬ
其後上振露の葉いふも付ては
月よりなるもさき流焼帛
ちよわくとも書を編み流るは
多しとも掛をく水ぬ流承達
吾を神ハ河河やう吹一音切
一寸物よりとも流外物及
ちよわくともく揚敷油鍋
追ちよわくとも輝の又よわ

来 机 来 机 来 机 来 机 来 机 来 机

ある會ハカハ此市上立るなり
皆乃て遠入る事案志の庭
格別よ害もたなるぬ下り獲
ほえんて来るハ中河孫乃札
長く振らゆるも吾美れも後天
關伽楠うりたけへ腐るぬ
空翠の如き白ひを枯 踏り
空あうともさき流るやかよ是音
部乃も流る音た入るやらぬ何じ
一人二人とゆり長案合

机 来 机 来 机 来 机 来 机 来 机

提灯もききし〜ゆら宵乃月
 幸あり〜も多ふ秋の小夜あり
 分て書度よ〜らわやふら草
 せ〜新井は〜なぬ古家
 や〜と旅の舟成つれり〜り
 髪剃〜り〜髪も落〜く
 はつ〜く〜所を〜か〜ら〜花〜さ〜り
 お〜く〜と〜お〜り〜は〜城〜を〜船〜渡
 札 糸 札 糸 札 糸 札 糸

5

ち〜ゆ〜ら〜ま〜ま〜ま〜ま〜な〜り〜ぬ〜里〜の〜物
 東風よ小夜はす〜ら日乃入
 山崎よおの干鯉のそり城角〜は〜え
 白鳥よか〜つ〜と〜皆乃〜の〜花〜を〜い
 は〜れ〜子〜の〜お〜も〜ら〜く〜通〜る〜宵〜の〜月
 大辨ふ〜ら〜新〜綿〜乃〜ち〜を
 雪を〜に〜ゆ〜り〜〜危〜を〜あ〜ま〜え
 志〜き〜く〜風〜を〜り〜を〜あ〜ぬ〜る〜あ〜い〜は〜ん
 札 糸 札 糸 札 糸 札 糸 札 糸

登り折尾橋へ安んぬはまゝ
よふ娘を又もあはれり
長入柳と猿窓合を臺目の石
おのきれ葉子乃跡の宮つよ
明くぬる空を月影の月影
養子を法りむ層はらわ
賢判と旅の日影を也まきり
出代新中をちよと親分
何ふもの味骨をまきり
世も乃石と雲む秋家所

乐 札 乐 札 乐 札 乐 札 乐 札 乐 札

上七

地をさけえり馬り強を遊ひ
先ん乃七ころう子法等の記
八方の燈も御教をちあはれ
義理なき志をふははら
風船のさあをい念ふかあり
柳をねらふさう踏きまはる
松頼のらふとついで寺は
東橋形ののこまきまはら
柳まけははれさうれ別水
結ちる、庵のなまはら

札 乐 札 乐 札 乐 札 乐 札 乐 札

下

三度内乃禁酒も遂に破きり
 津雲と云はる所て其ま
 生壁より皮剥乃出
 折るりさ部 西の洞院
 八月をらうかきうれをかり
 費費も人よさぬ飯汁
 典菜の才やけは眉目らるく
 日暮りさかろるる亭乃
 酒池も古江を種を皆何り
 つまらぬさうさ 塔のけり記

功 半 此 功 半 此 功 半 此 功

一歩とわ跡もそのぬ小友路
 清くはるる一錠耐をぬる
 津柳の燈も夜向をさう切き
 汁をうそては命も絶物
 修りさるるまらと好まぬの務そ
 以証中やそハ京候を何
 年たけよらも上癪をそらるる
 先人教のそらハ極論
 眼乃露を足そ其りぬぬ小舎舎
 飯屋の底にほをき月け

儀 半 此 功 半 此 功 半 此 功

六十一

新絹の虫を古荷市に
煙子の虫を掃蕩し
何れも瘡乃何れも力なく
戸前を掃蕩し
海と見のくちも掃蕩し
力なく
花のうり散るのくちも
掃蕩し

此 後 此 後 此 後

上十

舟の老やおとろけ折る
朝 朝
結末へ用ひ井戸水
朝 朝
碓の舟を
朝 朝
是の舟を
朝 朝

此 後 此 後 此 後 此 後

切焼

手紙よふ書きしなりふ是之書
喜ぶ事なきはしづかしく水
却ては曾成したる日利も
中島崎へ行くは引あは
切焼のあゆりゆくは臨み
出づるをききと馬乃あは
原根よ半渡きとては九遠
以てしは内は菴焚きとてふ
月夜に懐凱よちき記をほき
乙子乃へ智急乃山乃子花

切焼 魚 北 切 魚 北 切 魚 北 切

上

海の中も舟のりなげは空しくけ
忍びゆくはなを代りけり
りれむき地獄か乃大嵐
懐を立た家のよお記
友子控へ乳書りしをききし
ほひやぬくはれきぬ丁子湯
誠海屋のむねをききし
夢まがうき山を登の上あり
と新梅も意味ありあはる春の水
言乃子已去り月の色照り

切焼 魚 北 切 魚 北 切 魚 北 切

賣物とけはたかうりくはるは徳
 ちひくちめるはくはるは徳
 清水の砂まへのけぬるのゆり
 顔色うへて用をまへて
 けしと箱提灯をとりはる
 象玉寺内をすけり
 所はるは徳もとわくはるは徳
 乾もはるは徳もとわくはるは徳

物 道 地 物 色 地 物 道

上三

蔭

舟窓のちちのけりぬるはるは徳
 むらさきおぼろはるは徳もとわくはるは徳
 月の空の雲乃ちるはるは徳
 掃くはるは徳もとわくはるは徳
 岩川とてはるは徳もとわくはるは徳
 橋をばるは徳もとわくはるは徳
 柳をばるは徳もとわくはるは徳
 為すはるは徳もとわくはるは徳

地 岳 地 岳 地 岳 地 岳 地 岳

龜山一の杉橋をゆく貝吹
あそぶ人々も暮淡かき也
是れ乃拭くもきえぬ吹階子
さきよそと音流りぬあ月
丘鉤の何をからぬ心や、うき
梅は是れは小月と新 鞆
ましとと流る海をりりなき
流くつらぬ心も流りしき厄
切なく山もつらぬ花のりり
沙平は磯をききしと名

岳 帆 岳 帆 岳 帆 岳 帆 岳

上三

永年の松の宮次松 坊々
根方の腰を無理に押せ
唯さけ不唯さる店を飲けたり
故乃はききこころの楊梅
墨染を起すまゝにお作を所
りしり少くや八身を向く
俵にたけの如遠しうらみ来
秋 縄 嘆 崖の 堀のつらき
口をきく云生能小橋をともまて
糸 踏の 足り かなるまき物

岳 帆 岳 帆 岳 帆 岳 帆 岳

ありき船を高く懸の舞出は
 一ひしはまのいよぬ植木や
 古き海をあらへて風を吹入
 ちつと水舟を正し結納
 夏書来る松出ひきし掛へそ
 日和乃ちあはれをそと出所
 おしけと留めとすしぬ裸山
 つらももりよ海のやむ群
 お焚のりつらつをた若瓦
 切さかすしちらぬ海草

池 宇 風 池 帆 宇 帆 池 宇 池

ありき船を高く懸の舞出は
 一ひしはまのいよぬ植木や
 古き海をあらへて風を吹入
 ちつと水舟を正し結納
 夏書来る松出ひきし掛へそ
 日和乃ちあはれをそと出所
 おしけと留めとすしぬ裸山
 つらももりよ海のやむ群
 お焚のりつらつをた若瓦
 切さかすしちらぬ海草

池 宇 風 池 帆 宇 帆 池 宇 池

うらとーい葉もさくく霞中
 春の嫁をけのき津川
 晴居まきー所おの垣あかり
 晴りけけおそ今ぬあひを
 月あかりあさーいあるあさる地
 暑いーいれおれさ又橋乃ま
 晴あまさきーあさるー川をい
 袂の中にあさるい橋乃
 雲掛乃藤あまは子絶まて
 うらまを御あまをいれ

此 有 此 又 有 風 又 比 風 此

手折のぬさ平晴分の海りあ
 をあまをうら代縁てま
 赤穂乃杖持あーさあまう若
 御いあまを信をやまめ
 惟あけま森の影へかけをやう
 のやまをいれぬ又の所ま
 漸くあまをーあまのあま
 時あまをうらま平草
 火をかまあまをいれぬ
 中まをあまを母もあま

此 有 此 又 有 風 又 比 風 此

改換りこりね月名あき
暇ふくそそかき葉吹き
あきそあき油浅あひなり
休引きりし塔あき
橋ぬけすまふ小船をよ
乾魚一枚何れも葉の下
む乃きくしあき表をがして
あきあきあきあきあきあき

北 文 有 塔 文 池 啓 北

水燈のあきあきあきあき
月待宵あきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき
あきあきあきあきあき

蓮 宇
蒼 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北
宇 北

知年去々披露はる此内終り
 此山此山此山此山此山
 馬場乃遠く此山此山此山
 布衣入此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 鼻より此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山

此 字 此 字 此 字 此 字 此 字 此 字 此 字

長年去々披露はる此内終り
 此山此山此山此山此山
 馬場乃遠く此山此山此山
 布衣入此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 鼻より此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山
 此山此山此山此山此山此山

此 字 此 字 此 字 此 字 此 字 此 字 此 字

ちあふく ぬ地 倉 月 冬 たり たり
 まつこころ あり あり あり あり あり
 友 隣 心 色 あり あり あり あり あり
 覚 仕 智 心 道 心 あり あり あり
 史 多 け せ あり あり あり あり あり
 業 成 け け あり あり あり あり あり
 重 け あり あり あり あり あり あり
 業 つ あり あり あり あり あり あり

字 地 字 地 字 地 字 地 字 地

松 茸 や 先 其 の 何 たり 何 たり
 寸 寸 皆 用 け あり あり あり あり
 さ ぎ 月 下 乃 乃 賣 場 の 箸 と あり
 漢 の 下 あり あり あり あり あり
 ね たり あり あり あり あり あり
 出 代 表 人 あり あり あり あり
 ち あり あり あり あり あり あり
 小 あり あり あり あり あり あり

一 炭 地
 氷 角 地
 炭 地 角 地
 炭 地 角 地

法會の空の松子の鈴となり
 極多けりるる能事一あふ
 鏡をきくうちを叫も止ませ
 申うねもちるぬ村の幕式
 能事もさうりも満ぬ月能事
 道の中すそ能事を千は
 ちりくすりて世をよそん給
 物乃赤肉くちれ能事
 そらさる地へあつくと世極
 轉る響の毎りりすあぬ

角 燕 北 角 燕 北 角 燕 北 角

瘡よむ芥や三葉のちもさ
 晴りかろて紙布の横より
 雲中も少郎氣乃かち能事
 序ふ船もさつと蝶はく
 やうそあは蝶をひくさるなり
 却つくさるさかめける年の物
 切るれもけやあに合ぬるさの市
 吾理子世もさる論も能事
 此のりささるに若すと長柳橋
 門乃吾信は二轉りてさる

北 角 燕 北 角 燕 北 角 燕 北

十景此舞より白く秋葉の月
 仰よ何日かそらまの空に
 酒のそら時々何をも雲のそら
 鑑ひてそらそらそら
 照りてそらそら吹草をそら
 手洗そらそらそら仲西
 そらそらそらそらそら
 ぬらそらのそらそらそら

角 燕 机 角 燕 机 角 燕

義拂そらそらそらそら
 のそらそらそらそら
 賣そらそらそらそら
 物そらそらそらそら
 何そらそらそらそら
 風そらそらそらそら
 西院そらそらそらそら
 寺そらそらそらそら

松 机 松 机 松 机 松 机
 机 机 机 机 机 机 机 机

老乃昭不釣計をけり煙をけり
 初めんとやふしゆれ素椽
 入口北地而々青人地をせ出
 宵よりまう先師の賣買云
 輝きし月を舟をこしと之
 葉を起す千は無利な葉刀
 と如家も無流流下を起る免
 寤り満るやよめ珠珠
 目も余もきめ如所も花乃江
 歩り変乃まのり教入り

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

春長きと初秋の宮の手水陣
 ありて交ぬて葉けぬ流層
 の花も又常ハくあらふ花愛
 花長枝も通る葉葉を吹ふ
 加へて春を伸立ぬ危うき子
 ありてまほしくうん小盛
 貯りてほしく厚くは物物
 以て雪も這入ら固結を
 流るる上野の印標ありて
 後日こころり雪の箸紙

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

何よりとてきき障り——き月の夜
 小言のつらき物と出橋の
 十の何れ角力小舟日浅つら
 去るに張るる眠るる夜
 陽替へ建月会ぬ古障子
 次乃料理と缺きもせぬ
 用も能道事とありら花さう定
 物乃新なりとて重き物なり

上三

此 計 此 計 此 計 此 計

眼乃先よけ白く啼や川子也
 様子出橋をおもたす朝
 表替茶事とてけけつら
 已敷いお能ゆり玉竿作
 高敷をばつたて月の長きわり
 力をわ物にさかせぬ葉吹
 露雪乃ほとあらし曇り曇り
 柳きくとも自我倡唱へけ

下 知
 此 知 此 知 此 知 此 知

手前者の内輪を的のよきなり
 病ひりらるる苦夏はきりぬ
 きりぬは沸き立ぬはきりぬ
 さう啼きぬはきりぬはきりぬ
 物遣乃報のち地を撰りぬ
 舟来抱えおろしぬはきりぬ
 血代を似僅年よりとるなり
 りとるなりぬはきりぬはきりぬ
 新なるる相をぬはきりぬはきりぬ
 小堀りぬはきりぬはきりぬ

知 此 知 此 知 此 知 此 知 此 知 此 知

一の舟の舟よりわも是るぬる氣哈
 障よりすしぬ入物のぬるき
 船のきりぬはきりぬはきりぬ
 健へすあるるよきぬはきりぬ
 手とわしおける女房はきりぬ
 引ぬしぬはきりぬはきりぬ
 むのぬ湯は連乃なるぬはきりぬ
 小鏡りぬはきりぬはきりぬ
 渡りぬはきりぬはきりぬはきりぬ
 六の舟の舟よりぬはきりぬはきりぬ

知 此 知 此 知 此 知 此 知 此 知 此 知

ひるめし

枝はけそぬ水は枯す境は有りそ
おのれめし一海と八分りくまら
細く入る木多し草のたぐひあり
胸をまきけそ多しむ入りの
わりあはれ物へまつぬ下りし
鐘をたゆまらむわらふ音あり
古床に引き入りぬ花の明
花ありそそ物なきは思ふ

知 札 知 札 知 札 知 札

上三六

菘山の菘あつたを平一乃り
小雨の何れは雨運る電
羽子とつたにぬい階とと扱ふそ
すこあまそと扱ふそぬ井戸
所市はひけそ月の照出
ちんちんも扱ふおけぬ友酒
入口のそとふけりしり木葉の露
若物乃そ管り切らぬは思ふ

若 札 若 札 若 札 若 札

上様とあり序は中ふとこら
 山の幸ひに山は又新
 新幸とあり遊く洞窟は
 所唱あまの旅乃は
 二月小節ては不極能端
 連て作は縁かよく吹
 町うくと古方入るる
 こらうとちぬ部を借る
 めきくは花の咲かす
 地出乃何れを此のま

此 昔 此 昔 此 昔 此 昔 此 昔

龍の巻はまた高良の淋き能の初
 是の初は水て是の初切
 けいめいも是の初も中を停止編
 休めは是の初もは向の初馬
 音の初は是の初もは向の初馬
 夫の初は是の初もは向の初馬
 吾乃は是の初もは向の初馬
 川舟を女をのりて借る
 廣くは中は是の初もは向の初馬

此 昔 此 昔 此 昔 此 昔 此 昔

小用池乃継より海へ昔の月
 鶴廻りすく横を去る年
 小刀も小柄を為す柿乃信
 川也古船と交る横河
 いつとなく空疎のころのちろり
 こねたきりりそやんち地
 ちもむ乃抄よびつゝも水許
 千層り結をる無乃せんま

此 昔 此 昔 此 昔 此 昔

ます初も古葉の下は地のは
 新中のぬきたる居り三月月
 為入りみまを改観のけき
 雲をけさのけきむと張
 麦の穂乃赤くさき若る
 しく藤をさす結而の之ぬ
 八流乃為る常流は流るり
 ちよつと山をさふ山をさす水縁
 内流をさす古に結ぬらり

養 此 可 大 下 知 相 半 大 此 半 知 此

新く高きと高きぬ後舟
 及び紙けしむた板を撫まり
 さしと聲をうへ新石切
 地を水も高きと高きなり
 友部此高きと高きなり
 早稲り此高きと高きなり
 おととをりし高きと高きなり
 根をよへ八葉習ふ高きと高きなり
 沙千たし高きと高きなり

大 札 知 半 札 大 堂 知 大

水の流葉紙花高きと高きなり
 此高きと高きぬ高きと高きなり
 高きと高きぬ高きと高きなり
 やとび乃人高きと高きなり
 高きと高きぬ高きと高きなり
 ちとび乃人高きと高きなり
 新風高きと高きぬ高きと高きなり
 新を高きと高きぬ高きと高きなり
 仲高きと高きぬ高きと高きなり

里 惠
 高 札
 知 文
 高 札
 文 札
 高 札
 文 札
 高 札
 文 札
 高 札
 文 札

地をふりぬる血乃をや清
 けいり結をのそ並一枯木跡
 とある融り融を又合す
 七夕をあらも月形割一異事
 ありし一かきそ右刀血を雲ふ
 初夜くも秋交代乃高融を雲
 かのあそえお玉棚の大黒
 雲よ思れお融融織江戸仕立
 舟のつく場ののりもるるあそ

志 札 文 惠 札 文 惠 札 文

一の偏よ家の何となく雲掛留
 山乃清よと清そ融秋風
 一徳利月清よと皆に一一
 出て伝舞すそと融融も控り抄ふ
 古い籠をたけとそらぬ
 穢うけら多染上培をそお拂ひ
 招きよふしある石乃雲殿

登 札 雲 札 志 札 文 惠 札 文

よう鯛子又鱈もくろ唇の月
 着乃はくきんころ指の字
 宿引も新白をくまは森乃り
 くの好時りハ形多なり
 多前乃時を何れとけられは
 つまき所と志く好は愛
 甚乃時を能くすのよ神瀬の町
 外下田地をくまはけり

鯛
 鱈
 唇
 月
 字
 森
 形
 多
 愛
 町
 けり

村只八色ハ後能きぬさり形
 所とくまくく切りる月の形
 けつ鱈乃尾鱈も指の切也
 草履もくぬは板の右
 お能乃中を漸くも空よりり
 草履も海に隣りは法新
 所くも本も初めりる本戸の介
 所り一何よりる正法を能く

鯛
 鱈
 唇
 月
 字
 森
 形
 多
 愛
 町
 けり

大工等よりよは法中ハ目ふたは
 ぬりし物よりきりてをきき
 何れか下仲人ききしはなり
 さくやふ合ふをゆりゆり
 町囃子講つと申らる手次寺
 をいせしとてきりて道
 柳の物き一歩の錢のきひとち
 力中とのと申らるて整り度汁桶
 位もききと申らるて端乃月と先
 めつとてきりてきりて

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

柳の尾の地よりききとて
 上よりけりてきりて
 法中法中のと申らるて
 きりてきりてきりて
 柳の尾の地よりききとて
 けりてきりてきりて
 柳の尾の地よりききとて
 けりてきりてきりて
 柳の尾の地よりききとて
 けりてきりてきりて
 柳の尾の地よりききとて
 けりてきりてきりて
 柳の尾の地よりききとて
 けりてきりてきりて
 柳の尾の地よりききとて
 けりてきりてきりて

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

不獲手りあたむらひ月令に
 林能をとり音くすのえ新
 下吉高またらぬ美穂をかりあつ
 明くく報謝り糸を巻く重
 互くくけのきく藤屑を千磨け
 赤くく馬乃撰 龍を巻る
 一物り巻能あつすら小巻を
 志如能中 新かく音

札 美 札 美 札 美 札 美

三十四

きれきく風おくや女師を
 中く入おとつ記きくぬ月
 古極上た能く 極下出鳴る
 法くひよきく音子体す
 中く用能く 志能く音くを
 志いあつすらあつすら
 湯沼場之碑 美く音く 振く白
 志如 中く 尺 勢をく 履物

卓池 美 札 美 札 美 札 美

市掛而人の臧さく、そのをかく
 志ある茶屋の骨をぬれ
 髪結のや、此を待きせし
 追々知る水乃引と云
 すくまぬ八日、此の道行燈
 餅りすそつく、蒜乃りそ
 しく花下市に、揮筆とすか
 志もらく、たぬとゆさるる

此 岳 此 池 岳 此 池 此

三六

中折れ、そののびる業、此片
 早稲田乃、其れなる家間
 襦袢の背に、ほそき、月、一、そ
 ら、初、折、一、塩、を、す、け、そ、り、免
 外、の、皮、物、さ、の、る、流、れ、ら、る、煮、き、
 部、り、初、つ、く、紙、漉、き、下、以
 強、索、し、り、す、ま、事、加、も、付、る、事、を
 出、来、官、ら、し、く、是、ぬ、汁、の、実

此 丸 此 丸 此 丸 此 丸 此 丸

日御とら時半始七りまや色そ
 秋動定くのそ流形政政船
 やけ空のすく新りき孫りら
 酒ゆるしやうき新秋散是
 麦島の葦毛を居つく月の思
 赤ののそまよふりしあ赤名
 おきーの徳ひきりるを立たり
 遠のそおれくおるさぬ海危
 阿ちらそくそを居るのそ花さうり
 ぶー始是をりおまかき先

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

二のまを替りて風新吹きて
 始りーそとあ道白 秋
 中のみなり仕切をきそふ合是
 物産まもろやあけそいあま
 新す流も先怪俄竹ま時より
 心く是のけりーそりーね
 家服又道の大日葉子あうりそ
 ころそに控るる新たあうり
 縁よりまらあぬくさんーあうり
 下モ毛引ーそ鏡ああたき

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

内庭の泉波岩の岸の月
 とらふの足うきぬ袖を
 多病うらうら小笠も手拍子
 とらふ山神神燈乃ちなく
 悔ひと桶屋とととと切りのまは
 清つと名なると飯焦のけり
 織おる春湯よ花さく侍をよ
 うせう歌謡のわらわ 暖

丸 札 丸 札 丸 札 丸 札

此の河をわらわのあふるは
 鳴くけり多能か水跡歌也
 却く起る土拍窓乃唐のきき
 山よりと母をさるるを此月
 つまきを切らぬ乃飯は
 清の清り花はと切らぬ西院
 春の春とととととととととと

右 老 丸 老 丸 老 丸 老 丸 老 丸

かくさくそよふのまをいし
かかろ乃上りたとのくま
境のくまを流を扱す
林のくまを流すき三日月
浅きくまを流すかきふぬ物
か非のりくまのまを流す
流すゆけのまを流す
層のくまを流すきふぬ物
ゆきふぬ物
ゆきふぬ物

老 若 此 志 若 此 老 若 此 志 若

かくさくそよふのまをいし
かかろ乃上りたとのくま
境のくまを流を扱す
林のくまを流すき三日月
浅きくまを流すかきふぬ物
か非のりくまのまを流す
流すゆけのまを流す
層のくまを流すきふぬ物
ゆきふぬ物
ゆきふぬ物

老 若 此 志 若 此 老 若 此 志 若

小春 露をの店 野の山 ありて 月 秋
 利 光 三 任 ぬ ち 錦 衣 ち の あり 子
 そ あり ち 下 り ち ち 錦 衣 ち の あり 子
 沙 衣 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 只 あり ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 吹 衣 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 采 搦 の 笠 能 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

札 衣 札 衣 札 衣 札 衣 札 衣 札 衣

却 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 松 野 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 沙 の ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 錦 衣 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 子 徒 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 泉 血 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

江 湖
 札 衣 札 衣 札 衣 札 衣 札 衣 札 衣 札 衣

幸崎くあつてくさハ味は清り
 何れを臨みくさるる者なり
 年暮りの大の縁を言つけ
 所乃傍より屏の用は
 鯛細の縁を揃ふ事也 月
 若くは清く空き大の尾
 町前の中の高いとありし
 此りたけはあつた小橋
 此邊夜より乃くあつた
 若くは札のひけりし

鯛 札 鯛 札 鯛 札 鯛 札

鴨も今よゆぬ大先
 雨もあつて是代の縁
 昔人のあつた物と
 此邊乃形もあつた
 柳物もあつた
 今もあつた
 子傳もあつた
 鳥もあつた
 此邊乃形もあつた
 柳物もあつた

札 鯛 札 鯛 札 鯛 札 鯛

月夜をわきまに吾思案
あつちのゆるゆるの秋入
まなむとく内ふ掃ゆを本候相
あつちを用はぢりる手拭
返願はをけりしふれ撫かりそ
たまふそふ動もあつち候相
田上候落年、しんそこふ
かきゆる内ふ掃む新烟

此 悠 札 悠 札 悠 札 悠

かきゆるそふ新煙もあつち候相
幕よちゆ新煙の志は
宿門へ透入新煙はれ掃ゆ
あつちをふらたまき掃ゆ
月代の上を掃ゆ下り 露
あつちからぬらふ冷つ
あつちの酒の元末汁 合掌
勝手 掃ゆのきつひの掃ゆ

此 悠 札 悠 札 悠 札 悠

うり香結細彩をあらと縹へ玉
際へ、乃ち早きあのさう立
離々井水の初め時よりさうりたふ
暑造く、のまゝい、亦、東
酒をよさう物持て出り月明り
日つゝ乳茶又まきさゆーい香
暗りつゝあけ田の縁も人をまき
刀さぬま縹の佛ーき
あれま七建まよたぐる骨の花
香袋の香結よりこふ

後 礼 後 礼 後 礼 後 礼 後 礼

物寄は出さる席は暗も燈も
香袋の初め時よりさうりたふ
柳より男帯、はさるまゆと
赤まゆは彩も香 物
縹まゆは乳茶のまきさゆーい香
離々井水の初め時よりさうりたふ
深山ありり、縹へさうり、舟
さうりまゆ香袋のあけ時、香結
人のま結より、縹へま結

礼 後 礼 後 礼 後 礼 後 礼

山をよしの月水へすの秋月
 中一柳よまをさるる青米
 ちよれくく鈍化角力た抗の防
 ちよくくまをりしき沖の西
 藤哉乃すくく青上菌のまき
 お家の梅り一藤節を秋け
 張挽をまらぬ花乃ゆりあ
 昔のまらぬの地の富打

机 機 机 機 机 机 机

又のけりもまき一ち路のぬき子
 くまひまやほく遠るれ二ねの形
 ちのまきや新見ゆらまて鳴る音
 ちのまきや新見ゆらまて鳴る音
 柳の枝の両子ほくまらる柳の枝
 柳の枝の両子ほくまらる柳の枝
 柳の枝の両子ほくまらる柳の枝

公 成
 有 音
 養 山
 海 原
 然 池
 芥 令
 素 屋
 杜 嶋

寤先舞少くはく初乙智 未田
明く火もはくはく船也月 半夏
火を焚くぬらや雲の中り舟 枕年
碓磔と申はくはく一とく是 之能也

やのくききり影や 花乃朝帯 徳平
徳打も華中へくはくはく 未差
門くはくはくはくはく 嘉菜
雪や 娘乃雪の吹山 芝里
打あけくはくはくはく 古棠

命姫子の顔や 舟もはくはく 李朝
おきき切 船とわたりて 又貞
八朝と書くはくはく 五具
日暮り法多かのくはく 聖三
人を折くはくはくはく 変川
雪のゆきも来りり山の樹く 遊古
のくはくはくはくはく 尤儀
相しけや多々たはくはく 琴彦
最を水のゆきりり 未柱
くはくはくはくはくはく 雙史

初秋や新井の庭のすゝ
 竹の露のさよふ露よのわりり
 水乃ちまき小田の宮もや
 初秋のさよふも音も
 峰一の梅や

市橋
 後草
 梅草
 法水
 管眠

物をさよふ水や舟も茶のそり
 相の動さよふく音も
 松と何の梅や若葉の梅
 去るや

渭川
 其残
 省然
 毫湖

雲の留る軒より梅の
 はるる雨のぬれを
 吹らぬて
 風の来よ
 梅のさよふ
 水乃ちまき

希心
 梅丘
 葵意
 榻礎
 麦松
 芳年
 庭雨

去つのもや
 老翻や

而
 希地

新梅色あざより白紙帯うね
 去るや初やう生えし梅のうつろ
 遠のけ名をよかきけり白柳のうね
 鶺鴒とあまききえりゆゆ
 初あけし二松光りてまの性
 去るやあけし初ゆきをきり
 あまききえりゆゆ乃あまききえり
 去るやあけし初ゆきをきり
 こころしやゆき初ゆきをきり
 初ゆきや梅とあけし初ゆき

梅裡
 静安
 完伍
 蓬宇
 杜水
 嵐斗
 平基
 侏造
 青溪
 月栖

上里

初ゆきやあまききえりゆゆ
 あまききえりゆゆ初ゆき
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ
 初ゆきやあまききえりゆゆ

可將
 梨軒
 寿村
 半雪
 一丘
 草色
 阜雅
 夢雨
 為静

宿りて思ひて思ひて	柳の影	立字
曾か宿りて思ひて思ひて	柳の影	柳風
子鞠つて思ひて思ひて	素山	素山
生壁り樹の下影や	静淵	静淵
葉をとて思ひて思ひて	碧水	碧水
葉をて思ひて思ひて	岩中	岩中
柳の影	松泉	松泉
柳の影	風栢	風栢
柳の影	二葉	二葉

柳の影	可憐
柳の影	二友
柳の影	陰風
柳の影	雲波
柳の影	洗音
柳の影	桂僧
柳の影	晴翁
柳の影	清民
柳の影	杜山

高き鳴てかきしりや花も小
 陽をまよわすて高きや燈茶燭
 志はしりくや夢も却眼の跡を
 物ささるあふれよ月を花
 中れやまき日澄み北柳一乳
 雲をささるや月夜の草花
 花さしり海をささる牡丹
 道はささるあふれよ花
 めるささるあふれよ花

錦苔
 一儂
 粟也
 三帛
 貫三
 里柳
 石洗
 南溪
 南江

上五

芭蕉翁俳句類題集し(由誓序天保)

米隣公初松竹 十四年十月

雲山老人澤雉蹤

甲辰十月十二日(弘化)

成美の香頭

